

多様性と調和の国・インドネシアでの経験

宮川昂大

現地での生活、風土、文化、国民性

インドネシアは、約 3 億人の人口を擁し、世界第 4 位の人口を誇る国です。急速な経済成長と同時に、豊かな自然と多様な文化が共存しており、訪れるたびに新たな発見があります。17,000 以上の島々には約 270 の民族が暮らし、700 以上の言語が使われていますが、共通語としてインドネシア語が整備され、広く使われています。国民の大多数はイスラム教徒で、祈りや断食などの宗教的習慣が日常に根づいています。一方、バリ島ではヒンドゥー教が主流で、街中に供物が並ぶ神秘的な雰囲気も印象的です。首都ジャカルタは高層ビルが立ち並ぶ政治・経済の中心で、忙しさと活気にあふれた都市です。それに対し、私が住むバンドンは高原に位置し、涼しく落ち着いた空気が流れています。人々も穏やかで、初対面でも笑顔で話しかけてくれる温かさがあります。歴史をたどれば、インドネシアは約 300 年間オランダの植民地支配を受け、第二次世界大戦中には日本の統治下に置かれました。1945 年に独立を果たしましたが、日本人である私に敵意を向けられたことはなく、むしろアニメや日本食を通じて好意的に接してくれる人が多くいます。

私が暮らしているバンドンはジャカルタから車で約 3 時間、西ジャワ州の中心都市で「第 3 の都市」と呼ばれています。標高 700～800 メートルにあり、昼は 25～30℃、夜は 20℃前後と快適で、避暑地としても知られています。生活の中で驚かされるのは物価の安さです。Warung と呼ばれる屋台食堂では焼きそばや揚げ物、ナシゴレンなどの料理が 100～200 円ほどで楽しめ、辛味のあるサンバルが料理に欠かせません。新鮮な果物も安価で、マンゴーやパイナップルを日常的に味わえます。

インドネシアは、「多様性の中の調和」、そして人々の優しさを肌で感じることができ、ただ観光するだけではなく、「暮らしてみたい」と思わせてくれる不思議な魅力で溢れた国です。

自身の活動

私は、バンドン工科大学（ITB）で 1 年間、環境工学とはじめとした授業と現地での研究には限定しました。ここは初代大統領スカルノ（夫人として知られるデヴィ夫人も有名）の母校で、理工系分野で国内トップレベルの大学です。学生たちは国の未来を真剣に考え、日々熱心に学んでいます。授業では、学術的論文を参考にしながら、環境汚染を防ぐための具体的な方策をグループで考え、プレゼンする機会が多く、グループ活動ならではの協調性や環境汚染を防ぐための基礎知識およびそれをどのように現実の問題に結びつけるか、ということを考えさせられる授業が多かったです。

研究活動では、イスラム圏であるインドネシアにおいて、糞便由来の有機肥料が宗教的・技術的に容認されるのか、バンドン市民およびウラマーと呼ばれる宗教指導者を対象にアンケート調査を実施しました。インドネシアでは、人の糞便し尿を処理および保管するため、セプティックタンクと呼ばれる浄化槽のようなものを用いて糞便し尿が処理されています。しかし、そのほとんどは適切に処理されず、実際にはわずか7%程度しか処理されていないことが先行研究により示されています。この糞便汚泥の適切に処理し、有効に活用する策として、有機肥料としての利用が考えられます。日本でも下水処理場の汚泥が有機肥料として再利用されることが増えています。しかし、インドネシアでは、肥料としての利用には宗教的な問題点があります。イスラム教の教えでは、人の糞便は、**Najis**（不浄な物質）とされており、食べることはもちろん、その売買が禁止されています。それでは、人の糞便を肥料として使用することは許されるのでしょうか？どの程度処理すれば、肥料として認められるのでしょうか？そしてその肥料から育った作物を食べることはできるのでしょうか？このような内容のアンケート調査を現地の人に向け実施しました。

PR 活動



（左:川越名産さつまいもチップスを振る舞った際の写真）（右:狭山茶を振る舞った際の写真）

友好の証として、現地の学校の友人や、毎日顔を合わせる寮の管理人さんに、埼玉が誇る名産品を振る舞いました。特に喜ばれたのは、川越名産のさつまいもチップスと、香りが豊かな狭山茶です。インドネシアの人々は、甘いお菓子が大好きで、日本の洗練されたお菓子に強い関心を持っていることが分かりました。サクサクしたさつまいもチップスの食感と、素朴な甘さが彼らの口に合い、また狭山茶のほのかな渋みと香りが新鮮だったようで、非常に好評でした。

さつまいもチップスをきっかけに、埼玉県の魅力について話が弾みました。東京から電車で少し移動するだけで、歴史的な街並みが残る川越にたどり着けること、そして、さつまいもを活かした多様な甘いお菓子が楽しめることを伝えました。また、現地の環境学科に所属する友人たちには、春

日部市にある「首都圏外郭放水路」について熱心に紹介しました。日本が誇る世界最大級の地下放水路であり、その壮大なスケールから「地下神殿」と呼ばれていることを説明すると、彼らは日本の高度な土木技術と防災への取り組みに感嘆の声を上げていました。

今回の活動を通して、言葉の壁を越え、日本の文化や技術、そして埼玉県の魅力を伝えることができたのは、非常に貴重な経験となりました。現地の友人や管理人さんとの間に温かい交流が生まれ、日本の新たな一面を知ってもらい良いきっかけになったと思います。このような草の根的な交流こそが、真の国際理解へと繋がることを実感した修学となりました。